

いただいた評。

『声 記号にとり残されたもの』（白水社、1998年、10月26日『朝日新聞』）

1 富岡多恵子「おすすめの3点(松下裕『評伝中野重治』、工藤進『声 記号にとり残されたもの』、佐藤通雅『詩人まど・みちお』)」

... 中野重治は戦後第一回の参議院選挙の時、全国区で当選して47年から50年まで参議院議員だった。その時代がどんな時代か、その時国会議員としてどんな働きをしたか、中野議員の演説が、いかに紋切り型でなく、傍聴席が詰まるほどのジツのある言葉で聞くひとの心を打ったか、証人喚問の時の質問の巧さはまるでドラマさながら、などの記述を読むと、詩人中野重治への親愛からその文学に近づくしかなかった者にも、「国会演説集」なるものが読みたくなってくるのである。中野に「文学者は、国会ででもどこでもくそ真面目に働く必要がある」との言葉ありというが、同じ「くそ真面目」でも色合いの異なる、カトリック大聖堂主席司祭・ジョナサン・スイフトの「説教集」のとんでもないおもしろさを思い出させる。

しかし、それらを「読んで」も、聴いたひとのような言霊が発する臨場感が味わえぬのは、「声」による「時間的存在としての言葉」の領域を「文字」が奪い、言葉が「聞き手の自然感覚に関係なく空間的に定着される」ようになったからだが、制約を多くもつ「声」とは比ぶべくもない力を「文字」がもつに至る。その道筋には、太古からの国家権力にからむ物語もあったはず。『声』は副題通り「記号に取り残されたもの」をさまざまに論じて飽きさせない。『詩人まど・みちお』もまた詩の声について考えさせる。

2 佐々木幹郎の本棚より（『なごみ』1999年10月号）

第十話 『声 記号にとり残されたもの』

一読して、何という優しくおだやかな語り口の書物であろうか、と思った。言葉と文字と声について語りながら、フランス文学者としての外来の知識をふりかざすこともなく、どこまでも謙虚である。

そういう読後感は、実はこの本を書店で偶然手にし、最初の一頁を読んだ瞬間、予

感したことでもあった。一冊の書物との、そういう幸運な出会い方もあるのだ。

冒頭頁に、奈良の宮大工・西岡常一の『木のいのち、木のこころ』（草思社）からの引用がある。法隆寺修復の仕事を受けおった西岡は、建築学者たちと論争を続けた。そして、学者というのは「感心せん世界やと思いましたな」と言う。学者たちは宮大工が代々つちかかってきた体験や経験を無視した。「本に書かれていることや論文のほうを、目の前にあるものより大事にするんですな」。

著者はこの西岡の発言から、法隆寺を建てた飛鳥時代の大工たちの智慧は、おそらく縄文時代からの木の智慧によって成り立っていたのであり、それは一万年以上前から口伝であったに違いない、という。それを伝えてきた現代の宮大工でも、飛鳥時代の智慧に及ばない。にもかかわらず、学者たちはたかだか百年あまりの、文字で書かれた文献に頼ろうとする。

ここから一挙に、本書の核心部分に入って、著者は言う。近代人が言葉について見失ったのは、文字よりも声であり、声よりも心ではないか、と。「声」というタイトルの本であるにもかかわらず、文化人類学や言語学、記号学の領域から入らず、宮大工の木に対する言葉を導入部にすえるという論の組み立て方は、絶妙だ。

あとは一気呵成に読んだ。ホメーロスの『オデュッセイア』『イーリアス』に登場する単語から、古代ギリシャ社会での文字と声との分岐点を探ろうとする試み。文字で書かれた聖書を最高聖典としたプロテスタントに対し、カソリックは文字に頼らず「しるし」と「声」にもとづく体制を作りあげたこと。イエスは文字を知らながら、何も書かなかったという鋭い指摘。

ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』の邦訳では、修道僧が書物を「黙読」しているとされているが、中世の修道院では書物は「声で読む」ことが普通であったという検証。そして、プルーストの『失われた時を求めて』における、声を包む蠟燭の明かりの意味。

最語の圧巻は、宮沢賢治の『風の又三郎』批判である。方言を喋る地元民に対し、東京弁に似せたへんな言葉を語る「又三郎」は、賢治の似絵であり、東北人が無理して東京標準語を操ろうとしている姿、と読む。方言と、その底にある声の力。童話を書くときの賢治の心はどこにあったのか。

ここまで書きながら著者は、最語に自分に言い聞かせている。「大学の教師などという知識職業と言われることを何年もやってきた末に、言葉が意味よりも心を伝えるものであるという、どんな人でも体得しているものを私は忘れてしまっていたのだ」と。

『日本語はどこから生まれたか』(KK ベストセラーズ・ベスト新書) 書評

1) 2005年5月29日 『毎日新聞』 読書欄

印欧語との類似説く画期的起源論

普通、書評というのはその本の内容が最低でも六割は理解できたと感じたときにするものである。ところが、この本に関しては、その専門的な内容もあって、私の理解は四割、いや三割にも及ばないかもしれない。にもかかわらず、あえて紹介を試みるのは、ひとえにその重要性ゆえである。というのも、本書は、スタンフォード大学遺伝子研究チームの言語部門担当メリット・ルーレンの打ち出した「日本、朝鮮、アイヌ語などの極東言語は印欧語と同一起源」という仮説をかなりの程度まで検証しえたと思われるからだ。

われわれが英語、フランス語などの印欧語を学習するときに第一に面食らうのはモノや人を単数・複数で区別する文法的数(単複・人称)であるが、著者は、フランスの学生に日本語を教えたとき万葉集の「憶良らは」の「ら」の説明に苦しんだ経験(「ら」は複数ではなく親愛や謙遜の表現)から、印欧語と日本語の文法的数の起源の問題に興味を持つ。

たとえば、日本語には「山々」「道々」「蝶々」「爺々」「婆々」などの反復表現があるが、その反復は必ずしも複数を表すとは限らず、強意と情動を意味することがある。「子供」「子ら」の接尾語もほぼ同じである。いっぽう、印欧語では複数に *s* で表されるケースが多いが、この *s* もその起源をたどると、反復的機能を持つ指示語に行き着くのである。しかも、その反復は単複の区別というよりも、強調表現なのである。「反復は世界の多くの言語の文法的装置として知られている。反復の意味は語根の強勢にほかならない。複数形式に関してこの方法が用いられるのは、複数使用の本質的欲求の一つは語の強勢によってみたされるということである」

こうした言語の本質を強意と情動からくる反復に見るという考え方は一人称単数主格の理解に関しても示される。

印欧語では、一人称単数主格(英語の *I*、フランス語の *je*)は二人称や他の格よりも後発で、最初は *egoH* (*H* は母音の色合いの喉音)のような形で表されたと考えられ、ゲルマン系はこの *egoH* の前半、ラテン語系は後半を維持したものとみるこ

とができる。では、egoH とはなにかというと、フランス語の ce(-)lui-ci のように、ほぼ同じ意味の指示・強調辞の繰り返された形なのである。

ひるがえって日本語の「わたくし」はどうか?後発であるという点ばかりか、指示辞の反復という点もおなじなのである。「日本語の強意の助詞、シ、イの語源についても、指示的機能をもった小辞シ(其)、イ(汝)であったというのが大方の日本語学者の見解である。こうした観点からすると、ワ(タク)シのワはもちろん、シも代名詞だったと言える。代名詞シはその反復的、指示的機能によって強意の助詞とほとんど同じ機能を持っていたのである」

以下、印欧語の格変化と日本語の助詞、be 動詞のような印欧語の繫辞動詞と日本語の「は」「だ」、動詞の語尾変化と活用、否定辞(n-)の類似などについても、言語の起源は感情の強弱の表現にあるという主観性言語論からの説明がなされる。

読みやすいように書かれているとは言いがたいが、大野晋の「日本語タミル語来起源説」のあとを窺う画期的日本語起源論であることは確かだ。「日本列島の縄文時代前期の言語と、中央アジアまで来ていた印欧祖語とは通底していた、という私の確信は変わらない」(鹿島茂)

2)『週間朝日』2005年6月10日号「新書の穴」欄。

コギャルの「ウチら」も謙遜?

表紙をみておやおやと思った。日本語・印欧語同一起源説と副題にあるからだ。

「名前」と Name を比較して日本語と英語は起源が同じだとするたぐいのトンデモ本かと思ったのだ。言っちゃあなんだが、版元もKKベストセラーズだし。ところが、読んで瞠目、本格的祖語研究の一冊なのだ。著者は言語学とフランス文学を専攻する大学教授である。

本書は、日本語の祖語を求めることの難かしさを説くことから始まる。日本語はすぐ隣の朝鮮語と文法構造は酷似するのだが、音形が違いすぎる。有名な大野晋のタミル語起源説も、インド南部から日本列島への伝播があったにしてはその途中の痕跡がたどれない。

しかし、従来の言語学が視野に入れていなかった人類学や遺伝子学の成果を取り入れると、さまざまな言語に共通する祖先を考えることができる。人類はアフリカに誕生し、十万年ほど前にそこを出発、ユーラシア大陸・アメリカ大陸に広がった。

そうしてみると諸言語の底に共通の構造のようなものがあってもおかしくはない。

各論はどれも示唆に富むが、二章を割いて述べられた複数表現の話は特に面白い。日本語には英語やフランス語と違って文法的な単数複数の区別がない。名詞に「ら」をつける用法はあるが、万葉集の時代は「憶良らは今は罷らむ」とあるように複数表現ではなく謙遜表現だった。「犬ども」のように「ども」をつける用法もあるが、「子ども」は単数だ。「人々」「山々」など同じ語を重ねる表現はあるが、「牛々」「川々」はない。それなら、ヨーロッパ諸語が学校文法で教えられたほど厳格・単純に単複を区別しているかといえば、そうではない。やはり謙遜の複数というものがあるらしい。そうすると、コギヤル言葉の「ウチら」というおかしな単数主語も同様の謙遜表現かも知れないと、素人の「私など」は思ってしまう。

人間の言語能力は、一種の OS のように生得的に組み込まれているという近時の心理学の見解にも対応する刺激的な一冊だ。(呉 智英)

3) 『月刊言語』(大修館)2005年10月号。

言語圏 α ・言葉の書架

日本語では「山々」「国々」「神々」など同じ語を反復して複数をあらわすものがある。「蝶々」「葉っぱ」「ちち(乳)」なども反復形ではあるが、ただちに複数を表わすわけではない。反復は、強意や情動性の表現に関わる。同じ事がサンスクリットにも表れるのだという。本書は文法的な特徴が、日本語と印欧語とで並行して現れる現象をさまざまなレベルで取り上げ、二つの系統がこれまで言われてきたほど画然とした違いはないであろうことを、おそるべき博搜と柔軟な解釈とを示しながら説いた、まことにスリリングな読み物である。

「『日本語の起源』の謎解きは専門の者も専門外の者もすべて、日本語体験を通じて参加できるロマンの宝庫である」(あとがき)。格助詞「から」の起源を論じる冴えた分析には圧倒された。(安野 祐)

4) 『国文学 解釈と鑑賞』(至文堂)2006年1月号

「新刊紹介」(り・ちょうは 李 長波 京都大学助手)

本書は「日本語」・「インドヨーロッパ語」同一起源説を提唱するために、従来のような語彙単位ではなく、言語の根本特徴に着目して比較した意欲的な作である。内容は導入の第一章を除いて大きく分けて、1「文法的数と人称」(第2章と第3章)、2「人称代名詞」(第4章)、3「格助詞の起源」(第5章)、4「名詞文と動詞」(第6章、第7章)、5「否定の形成」(第8章)になる。すなわち、1については、「(印欧語は)一・二人称が代名詞として確定する以前は、もしかしたら朝鮮語や日本語のように、唯一固定した人称代名詞をもたなくとも、さしつかることなく事が運んでいた時代だったのかもしれない」(74頁)と推測し、「印欧語では双数は、おのれが生み出したこの二つの数概念(単数・複数:引用者)のどちらかにしだいに吸収され消え去ってしまったのに対し、文法的数の組織が名詞においても動詞においても印欧語のそれとは違った方向に発展した日本語では、いまだに原初の双数の姿に近い双数が見られる」(114頁)と指摘する。2については、上代日本語の「ウヌ(オノ)」の「ウ」はもともと「私とお前(たち)」であり、「ヌ」は「お前(たち)と私(たち)」であるとして、「ウヌ」は「我々」という語二つからできた一種の反復語である(167頁)と新説を呈し、3については、「日本語は指示詞「ナ」一つから、主格、属格、対格という主要三格用の助詞をつくりだしていた」(194頁)と格助詞の起源を説き、小辞ガとハは、「後置されることを除けば、印欧語の冠詞と同じ機能を持っている」(211頁)と両者の共通点に及ぶ。4については、日本語は「名詞文的言語」(212頁)であり、存在動詞「居(ウ)wu」は「アル、イル、オルの根底にある」(220)として、「サンスクリット動詞の形成において、日本語wuに似たはたらきをするのは同じ存ン動詞のasである」(230頁)と指摘し、5については、「印欧語では否定辞の代表である小辞(n-)は代名詞小辞*neに関連していた」として、「印欧語の否定小辞についての指示詞、強調(肯定)辞、否定辞の相関が日本語にも見られるとすれば、日本語否定辞ナナの起源に代名詞小辞ナナ(汝)を想定できる」(267)と推定する等々、印欧語以下数々の外国語と日本語(現代語の方言から上代語に至るまで)についての博学ぶりが最も印象深い。しかし、著者は最新の遺伝子研究の推定に基づいて「言語の起源もひとつの祖語に収斂すると考えられる」という。ハたして現代のヒトの起源がそうだとしても、それが即言語の同一起源説につながるかどうか、最も疑問が残るであろう。具体的言語現象の解釈の当否についてはそれぞれの専門分野の読者に俟つとして、専門・一般を問わず、言葉に興味のある方に一読をおすすめしたい。

5) 『週間読書人』 2005 9月23日(金曜日)号

「与那覇 恵子の読書目録」(下)

近くの書店で平積みになっていた工藤進『日本語はどこから生まれたか』(ベスト新書)が目にとまる。その副題〈「日本語」・「インド=ヨーロッパ語」同一起源説〉に惹きつけられたので、手にとってパラパラめくっていくとトンデモ本にはない緊迫感があって即購入。

トカラ語やヒタイト語などを手がかりに印欧語を古い形まで戻すと、日本語と印欧語は数や人称による変化といった大きな違いも接近してくる。数と人称代名詞という、一見、簡単そうなところが実は深遠なものだったというショックがあった。東北方言という著者の母語が随所で生かされているのを見ると、急死で未完に終わったけれど、故中本正智氏が『日本語の系譜』(青土社)で提示した、琉球方言を使って東アジアにまで広がる日本語の古層を探るという試みを思い出しました。二冊とももう一度じっくり読みたいと思う。(…後略)

6) 『千年紀文学』(隔月刊)2006年 1月31日(60号)

「二」という特別な数について 高良留美子

… 工藤進著『日本語はどこから生まれたか ― 「日本語」「インド=ヨーロッパ語」同一起源説』(KKベストセラーズ、2005)のなかの数についての記述は、非常に興味深い。

双数が単数より先にあった?

インド・ヨーロッパ語(印欧語)にはふつう単数、複数、双数という三つの数があった。しかし双数というカテゴリーは、ほとんどの現代印欧語では消え去っている。ギリシャ語とサンスクリット語には双数があり、とくにサンスクリット語は双数を堅持している。ラテン語には起源的には存在したようだが、語源の段階で想定されるだけだ。

ギリシャ語では3000年前のホメロスの頃から、双数の名詞に必ず双数の動詞が使われることはなく、複数や単数の動詞も使われていた。双数の動詞は古い言いまわしと思われる典型的な場合を除き、複数にとって代えられつつある。典型的な場合

とは目、肩、耳、腕など自然に対になっているもの、あるいは二人兄弟の英雄などの場合である。これらを自然双数という。サンスクリット語では自然の対ではなくたまたま対になった組み合わせにも必ず双数を要求するが、これを偶然双数という。印欧語には、「ヴァルナとミトラ神」を省略して「ヴァルナ神」と記すような省略的双数もある。

省略的双数のほうが自然双数より古いという説もあるが、工藤氏は自然のなかによく見られる同質的双数のほうが先ではないかと考えている。「同質のものなかの二という量的区別は、幼児が自然から体得するもっとも具体的で基本的な数的区別ではないだろうか」というその意見に、わたしも賛同する。嬰兒が最初に生きる糧を得る母親の乳房を思い浮かべてもいい。さらに工藤氏は書いている。「一の重なりが二を生んだのではなく、二の発見が一の概念を明確にしたのではないか。腕は二本あるから片腕という発想が生まれるのであり、片腕が二本あるからといって両腕になるのではない。人はまた二とは二以上の数(複数)のはじまりであることをしだいに実感していく。」「文法に単複という数的観念が生まれたきっかけは双数概念の明確化によるものではないだろうか。単数、複数という概念を生み出した双数は、ラテン語では男性に吸収されたように、主に複数によって吸収されたのである。」

現在ほとんどの言語から消え去った双数は不要に見えるが、かつては広い守備範囲をもち、もしかすると文法的数体系のなかで最も古く、単数・複数の概念のもとになっていたかもしれないのだ。

モロとカタにみる日本語の双数感覚

日本語の名詞に、印欧語にあるような複数体系がないことはよく知られている。しかし複数はタチ、ナド、ラ、ドモといった接尾語によって、あるいは名詞にモロのような接頭辞をつけ加えることによって表すことができる。

モロには多くの、すべての、という複数的な意味と、双方の、二つの、という双数的な意味とがある。『国語大辞典』のなかのモロを冠した八〇あまりの合成語には双数的なモロが多く、すべての、という総数的意味で用いられている例は意外に少ない。多くはモロ手、モロ腕、モロ差し、モロ刃など双数の、二つの、という意味である。接頭語モロには対語があり、その一つはワキである。しかしもっとも目立つ組み合わせはモロとカタであり、この対語は上代から見られる。そしてカタの造語力はモロよりはるかに大きい。カタは、片目にたいして両目という言い方があるだけに、不在を思わせる。カタは必然的にもう一方を呼び求めるのだ。カタのも

つ欠落、不在、不満、不完全感は、カタのこのような、双数の一方を指す意味に由来している。対となるべきものがさしあたって不在だということは、それを呼び起こそうとする強い喚起力につながる。カタは文学では好んで用いられる。

モロとカタの検討から明らかになることは、双数感覚は日本語にもあり、それを表現するいくつかの方法があったということである。双数、総数とも表現できるモロには、比喩的な意味が保存された。たとえば「両手をあげる」という表現の「両」には、「完全な、十分な、欠けるものがない」という意味はないが、「モロ手をあげる」という表現における「モロ」にはそれがある。モロの概念は、カタの不完全さを補う完全数を表しているのである。

そしてその完全数は、「日本の境内の石の台座に置かれている狛犬は二頭一対でなければならない」というところにも表れているように、「二」である。寺門の両側に二体の金剛力士像が置かれていることも多い。狛犬も力士像も一方は口を開き、一方は閉じているが、これは梵語文字表における最初の文字アと、最後の文字ンを表している。一切の言語、音声はこのア・ウンの二音に帰するのであり、この二音は一切諸法を意味すると考えられていた。二頭の狛犬の二が数として完全無欠の「二」であるという見方は、こうした仏教の考え方も矛盾しない(工藤進の双数観の紹介はこれで終わる)。

完全数「二」を階層化した西洋形而上学

「二」を尊重することは、人間や動物の身体に近い数感覚なのである。その場合二つは同一ではないが対称的であり、価値において平等である。古代にはなかった知識をつけ加えれば、脳における右脳と左脳、DNAにおける二重螺旋、さらに現代のコンピューターが使う二項操作などもある。

しかし「二」をけなし「一」を善とする社会は、二つが平等に並び立つことを許さない。どちらか一方をもち上げ、他方をおとしめる。そうして「二」のあいだの平等性を崩し階層化していくのである。左手と右手についても、左手は卑しめられ右手は尊重されるようになる。内と外、自己と他者、男と女、聖と賤、自然と技術、等々にも同じことが起ってくる。それを典型的に定式化したのがプラトンであった。階層的二項対立とそれを理論化した西洋形而上学は、国家を形成し、「一」を尊重して完全数「二」を複数に吸収していった社会の哲学なのである。(つづく)

『文法の復権』（秋田・無明舎、2008年5月10日）

清水徹（文芸評論家、明治学院大学名誉教授）私信

工藤進様

いい季節になりました。お元気なようでなによりです。

ご高著『文法の復権』を拝受しました。あつくお礼申しあげます。もう、大兄が今学年一杯で定年とは、何と月日の流れるのは早いことか。こちらが老いるのは当然です。

ご高著、早速拝読しました。深い学識が滲み出てくる、というか、一見さりげなく、「名詞と客体」とか「命令法」とか初級文法的な項目をたてながら、古典語やサンスクリット語との関連などにまで筆はおよび、一見単純な文法項目の奥にひそむ深さを感じさせてきます。大兄はこういうことを研究なさっていたのか、と改めて感服いたしました。

ブルーストの冒頭の一句についての文章は、小生の思い出もあるせいか、やっぱり迫力があります。再読して、これがあの『失われた時を求めて』のための最良の入門のひとつであると痛感しました。

「とりが鳴く」は面白かった。秋田出身の大兄というレンズと万葉集と古代日本語とサンスクリットとが、ふしぎに交流する、それは知的好奇心をそそります。

ますますのご研鑽を切にのぞんでいます。またそのうち、お眼にかかる機会もありましょう。どうぞ、健康にご留意を。

5月22日

（清水徹）